

# 総評

河北新報社常務取締役 鈴木素雄

## 何のために書くか

劇作家・小説家として数多くの作品を残した山形県川西町出身の井上ひさしさん（2010年没）。生前二度ほど、取材で警咳に接する機会がありました。丸眼鏡の奥の目はいつも柔和で、文士風を吹かせることもなく丁寧にごちらの質問に答えてくださったことが思い出されます。『自家製 文章読本』など文章論も多数書いたり講演したりしましたが、井上流文章論の核心は次のようなものです。

むずかしいことをやさしく  
やさしいことをふかく  
ふかいことをゆかいに  
ゆかいなことをまじめに  
書くこと

新聞記者という職業柄、「どうしたら文章が上手に書けるようになりますか」という質問をよく受けます。新聞の場合ですと、結論から先に書くなど、いわゆる「逆三角形」の構成を新人時代にたたき込まれます。皆さんも学校で作文の基本を教わっていることでしょう。技法上の型は無論マスターしなければなりません。ただ、それだけではない。井上さんの文章論は「何のために書くのか」という根源的な問いに対する答えを平易な語り口で私たちに残してくれています。「むずかしいことをやさしく……」は、私の座右の銘になっています。

『わたしに『ちから』をくれたこと』をランドテーマにした「東北電力第44回中学生作文コンクール」には、新潟を含む東北7県から1万5656編の作品が寄せられました。いずれ劣らぬ力作、秀作ぞろい。審査に当たって基準に置いたのは、もちろん井上さんの箴言しんげんでした。

最優秀賞に輝いた秋田県横手市立平鹿中3年柿崎正宗さんの『つながりの中で生きる』は、「棚経」という地域独特の勤行を夏休みに手伝った経験を生きて

生きと記しました。仏間の梁はりに頭をぶつけるは、ろうそく着火用のライターの特参を忘れるは、どじを踏む様子が何ともほほ笑ましく抱腹絶倒してしまいました。細部の描写が巧みで、野球から着想した比喩もはまっていました。井上さんの言う「ゆかいに」が全開でした。

一方で「ゆかいに」だけなら、単なるコントで終わっていたことでしょう。柿崎さんは未熟な自分を支え、見守ってくれた地域の人々の存在を再認識し、死者をも含めた地域の「つながり」に力の源泉を見いだしたのです。東日本大震災を経て、共助の精神は一層切実な課題になっていきます。柿崎さんの「ふかく」「まじめな」筆さばきから得るものは多いと思います。

自分に生きる力を与える存在として、家族や部活に題材を取った作品が多かったのも今年の特徴でしょうか。優秀賞を受賞した青森県平川市立丘上中2年佐藤那実さんの『前だけを見て』は、体調不良に陥って落ち込む自分を病弱な祖母がそれとなく励ますヒューマンストーリー。方言交じりの会話が二人の豊かな関係性を浮き彫りにしています。日常のちょっとした出来事、やりとりの中に生きるヒントが潜んでいるのかもしれない。

新潟県長岡市立刈谷田中2年山家生流さんの『勝つための負け』は同じ部活でも、一冊の本から戦術論を導くユニークな論考でした。単なる読書感想文に終わっていないのは、本の内容を自分なりにかみ砕き剣道の実践に生かしているからです。「剣術」とはよく言ったもので、中学生にして既に師範の境地を獲得したかのようです。井上さんがある著書でこんなことを書いています。「一冊の本が、読んだ人の考え方、生き方を変えるところがあります」。言葉の海に遊ぶうち、知らず知らずに文章力も向上している自分に気付くことでしよう。

審査を通じて気になった点の一つ指摘しておきます。最終審査に残った作文のうち男子生徒の割合は18%でした。応募の段階で既に「女性優位」にあるようです。これはどうしたことでしょう。文章をしたためることに性差があるといういはすはなく、来年は「作文男子」の奮起を期待したいと思います。